

2023年9月15日

計2枚

報道関係者各位

**チャン, クリスチャン准教授 (メジャー: 心理学) らが  
イグ・ノーベル賞 教育学賞を受賞**

9月15日、国際基督教大学 (ICU: 東京都三鷹市、学長: 岩切正一郎) 教養学部のチャン, クリスチャン准教授 (メジャー: 心理学) が、Katy Y. Y. Tam 博士, Wijnand A. P. Van Tilburg 博士らとともに、イグ・ノーベル賞 教育学賞を受賞しました。イグ・ノーベル賞は、1991年に創設された人々を笑わせ、考えさせた業績に贈られるものです。授賞式は日本時間9月15日 (金曜) にオンラインで行われました。今回の受賞は、2019年および2022年に発表した、退屈な授業に関する中学および大学での調査研究に対するものです。

香港の中学生を対象とした研究 (2019) <https://doi.org/10.1111/bjep.12309>

香港や英国の大学生を対象とした研究 (2022) <https://doi.org/10.1111/bjep.12549>

-----  
**チャン, クリスチャン准教授からのコメント**

イグ・ノーベル賞委員会が引用した2つの研究は、前任の香港大学で指導していた博士課程学生のケイティ・タム博士 (現トロント大学) と、共同研究者のワイナンド・ファン・ティルブルグ博士 (エセックス大学) と私が、「生徒や学生が教室で退屈を感じる理由」を解明しようとする研究の一部です。

ある研究では、教員自身の退屈が生徒・学生に影響を与えるかどうか (ある程度は影響します)、そしてもう1つの研究では、生徒・学生が退屈であることを予期することが、授業中の退屈をどのように悪化させるか (これもある程度は影響します) を調べました。これらの結果を確認するためには、さらに多くの研究が必要ですが、概ね以下を示しています:

- 1) 退屈は、通常、どの程度熱心に取り組んでいるか、どの程度熱心に取り組みたいかにギャップがあるときに生じること
- 2) 教員のウェルビーイングは生徒・学生のウェルビーイングと学習に影響を与える可能性があること

退屈に関する研究が、受賞の前提である「笑いを誘い、そして考えさせる」トピックとして評価されるとは思ってもみませんでした。しかし、今にして思えば、人々特に生徒・学生が、教室で退屈を感じる理由を知ろうとする研究に真剣に取り組みすぎて、内在するユーモアを見抜けなかったからかもしれません。

受賞を目指したわけではありませんが、このイグ・ノーベル賞の受賞を心から感謝しています。

私は、楽しい教員が楽しい生徒・学生を生むと固く信じています。とはいえ、教員が教室で元気に振る舞うことを強制するつもりはありません。むしろ、教員が、自分たちが評価され支援されていると信じることができれば、より多くの心理的資源を「教える」「教育する」「次世代を育てる」といった使命に使うことができるのではないのでしょうか。

本研究が、教員のウェルビーイングの重要性や、生徒・学生をサポートするために教員もサポートが必要であることを証明する一助となるのであれば、研究者として社会貢献したことになります。本研究論文の中で、生徒・学生が退屈を感じるのは偏見のせいであって、退屈な教員だから（だけ）ではない、という指摘は自分自身でも気に入っています。

退屈はどこにでもある感情です。人間はしばしば、退屈を紛らわしたいと思うものです。退屈の研究者の多くは、退屈が他の感情と同様に重要な機能を果たしていることを示そうと探求しているのだと思います。おそらく私たちは、自分の内的体験に「退屈だ」「好ましくないものだ」とレッテルを貼り、そこから逃げようとするのが早すぎるのでしょうか。これは逆効果です。むしろ、退屈は、自分の注意をよりよくコントロールすることを教えてくれます。自分のしていることに没頭していれば、(しばらくの間は) 退屈さに感わされないはずです。

以上

=====  
問い合わせ先：国際基督教大学 (ICU) パブリックリレーションズ・オフィス

(担当：吉良、小瀧 Tel：0422-33-3040 Fax：0422-33-3355 E-mail：pro@icu.ac.jp)